

強さとは

クリーパー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ある日、一人の少年が幻想郷に迷い込んだお話。  
小説家になろうにも投稿しております。

人外の存在

目

次

1

1

# 人外の存在

1

今、一人の少年が森の中を歩いている。少年が歩いている道には木の根がいくつも張り巡らされており、歩くたびにゴツゴツとした地面が足の裏を通して伝わってくる。空は晴れているようだが、背の高い木々が太陽の光を遮っている。それにより、ひんやりとした、または少し寒気のするような空気が辺りを漂っている。

いや、この寒気は少し異常だつた。いくら太陽光が遮られているといつても、自らを抱きしめるようにして暖めなければならない程の、身体の芯まで凍らせるような、そんな寒気を感じている時点で異常だつた。

足を止め、息を深く吸い、長く吐き出した。吐き出された息が白くなる事はない。

「…やつぱり、変だ」

寒くもないのに、なぜこんなにも寒さを感じるのか。…なぜ、段々と、感じる寒さが強くなつてくるのか。

彼は謎の寒気から逃げるように、少し早く歩き始めた。だが、痛みを感じるほどの寒気が弱まるなど無く、寧ろ強く大きくなつていった。

少年は走り出す。これ以上寒くなると身体が言うことを聞かなくなりそうだからだ。

しかし寒気に氣を取られ、木の根に足元を擗われた。

「つ…!」

彼は右半身を強かに地面に打ち付けた。肌の表面からじわじわと痛みが内側へと浸透していく。

痛みを感じながらも身体を起こす。そうしないと…

目の前にいる化物に喰われてしまうからだ。

「……。」

その化物の見た目はただの少女にしか見えない。金髪に真っ赤な瞳、真っ赤なりボンを首元に結び、腕は白に覆われている。その上に黒を纏っていた。その顔には見たものを温かくするような笑みがあつた。

こんな森の中を少女が一人歩いているのは奇妙な光景だろう。だが、それ以上の奇妙な、異常な光景がそこにあつた。

その少女は、人の腕を食べていた。

彼が感じていた寒気はこれだつた。生き物ならどんなものであれ備わっている機能。

命の危険を知らせる機能だ。

彼の機能は生まれて一度も使われた事が無かつた。それゆえに、彼は寒気だと感じてしまつたのだ。

少女が人の腕を食べながら少年の方へ歩いて行く。ここに来るまでに食べて來たのであろう、口の周りや腕、髪、腹の辺りや足など、全身に血が付着していた。

少女が近づいてくるにつれて、少年の鼻が異臭を捉える。この状況を見れば容易に察しがつく。

少年は身体を起こそうとしたが、動かなかつた。寒さが彼の身体に纏わり付いているようだつた。

少女は腕をぱくんと平らげ、倒れている少年の前で立ち止まつた。挨拶をするように腰を少し曲げ、両手を後ろに伸ばし、満面の笑みで言葉を発した。

「ねえ、あなたは食べてもいい人類？」